



大阪大学合格者対談



学部・学科の方向性や、志望大学はいつ頃から考えていましたか。

東 出： 大阪大学を考えたのは、高1の最初の模試で志望校を登録するときです。化学の研究ができて、研究費も大きい大学で、家から近いという理由で選んだのが初めてでした。

化学に興味をもつようになったのはもっと前で、中2くらいには「Newton」という科学雑誌をめちゃくちゃ読んでいました。中学の読書の時間とかもずっとNewtonを読んでいる、みたいな。高校に入ってから本格的に化学の勉強を始めた感じです。阪大は、はじめは自信がなかったけど、高3の8月に受けた大学別模試がB判定で。A判定まで偏差値だとあと0.1くらい。それで行けるかもって思いました。大学別模試を受けて実力が分かったので、これは突っ走ってもいいんだなと思いました。

木 村： 僕は、算数のときからもともと得意だったのはあります。好きな教科っていうのがまずベースで、そこに中1からちょっとスパイスが乗っかってくる感じで。「数学ガール／結城浩」という小説があって、内容的には高校から大学内容の数学なので、中1には難しいんですけど、でも家で調べながら一年間くらいかけて5回くらい読んで分かって。中学でやる数学と大学の数学は違うんだって思って。大学の数学ってもっと面白いんじゃないかなって。僕は初め工学って言ってたんです。祖父が京大の工学だったっていう安直な理由なんですけど。でも数学ガールを読み終わって中2からは数学系に変えました。

森 田： 僕は志望はめちゃくちゃ変わりました。高1のときは経済って思った。経済とか法律とかに興味があったので。でも理系がいいって

なって。大阪公立の数学科。他には薬学部とかを考えてました。そのうちに学力が上がってきて阪大を目指すようになった。最初は数学科を考えていたけど、高2の頃に物理系が好きになってきたから工学部になったっていう感じです。

大学を卒業した後のビジョンは何か持っていますか？

木 村： 大学院に行きます。そのあとは三択です。研究者になるっていう方向で数理物理学専攻か、普通に数学だけでやるか。でも、先生方にお世話になったっていうこともあって、教師やりたいなとも思う。あとは芸術家。音楽が好きなので。やってみないと分からないし、芸術系だけで生業にできる自信はないですが。

東 出： 大学の先はまだ決めてないですけど、一つの道は研究者。もう一つの道は予備校講師かなと。教えるのは好きなので。(木村くん)に教えたりしてたし。

木 村： 共テの直前とかもお世話になってました(笑)

森 田： 僕は大学院に行くつもりですけど、後期課程(博士課程)は迷ってます。企業に入るか後期課程か。

高1・高2の間、勉強はどんな風にしていました？

森 田： 高1のときは、ずっと数学の「4STEP／数研出版」やってました。あと、物理の予習はしていました。それから、高2の6月にアカデミーで数学の先生に「大学への数学 スタンダード

進学先

大阪大学

理学部 数学科

木村 匠汰さん

向陽高校

進学先

大阪大学

理学部 化学科

東出 悠希さん

向陽高校

進学先

大阪大学

工学部 電子情報工学科

森田 悠希さん

向陽高校

インタビュアー

岡 哲司

(AC ターミナル校カウンセリングスタッフ)

演習／東京出版」をやると良いよとすすめられてやってました。高2の3月くらいまでに全部終わらせました。

東 出： 化学を先に進めていたのは、高3になってけっこう効きました。自分の中で化学は高3の初めあたりで全部終わったので。そこからは「重要問題集／数研出版」をやって、終わったら「化学の新演習／三省堂」をやって。結局、現役生って高校で理科が終わらないので、そこでアドバンテージがとれるっていうのはめちゃくちゃ大きいと思います。だから理科をやるのはいいと思います。学校で用意された映像授業を受けて、「リード α ／数研出版」を解いてみたいな感じで進めていました。参考書とかで読み込むより、授業の方が僕には理解しやすかったの。

森 田： 同じ。物理の予習は絶対に映像授業を受けて、「フォローアップドリル／数研出版」を解いて、リード α を解いて、その後に学校の授業っていう感じで進めていました。

木 村： 数学の勉強の進め方は、中学から話さないとだめですね(笑)。中学のときに、高校の内容もやっていたので。まず、中学校の数学が小6で全部終わってたんですよ。中学受験の日までに。勝手にやっていたの。

東 出： 中学受験、組み合わせで解いたんやろ？

木 村： そう。表とか樹形図とか使う問題も、数学のやつで。一行くらい書いて答え書いて。で、中学では高校数学スタートで。YouTubeの動画で勉強して、数Ⅲまで全部終わったのが中3の終わりくらいって感じですね。でも中学の間は自分の好きな単元から学んだので、ちょっと忘れてるところとか、公式を理解していないけどとりあえず使えるようになっていう上っ面なところがあったので、高1のときにそれを「チャート式参考書／数研出版」の青で全部埋めました。けっこう分かっているところが多かったの、青チャートは爆速で進んで。高1終わるころには数Ⅲまで終わりました。重要問題とエクササイズと総合演習が中心だったので。で、高2からはアカデミーの数学の先生の教えに従った感じです。



サテライン講座について教えてください。

東 出： 受けたのは、富田先生の英語、荻野先生の数学、西村先生の化学、為近先生の物理。全部良かったんですけど、特に為近先生の物理が良かったです。僕は、冠模試の物理は全部平均点を割ってたんです。もともとそんなに得意で



はなかったの。でもサテラインで考え方を学んで、それを基に進めていくと必然的に解けるようになっていきました。どういう知識が必要かとか、どういう考え方をするかとかを整理してくれていることを、復習するときによく感じました。

木 村： 為近先生の物理は、道具が少ないのが良かったよね。いっぱいアイテムを持ちすぎて使う時に選ぶのに困るのではなくて、いつもこのやり方っていう感じ。だから、覚えることも少なくて、試験での再現性が上がったと思います。

森 田： 僕は漆原先生の物理。物理は自分でずっと予習をしていて、定期考査も余裕だったんですけど。でもサテラインで受けたときに、すごく分かりやすいと思って。今まで全然できてなかったなって感じました。考え方が改まった感じで。そのおかげで入試問題も対応できるようになっていった感じです。あと、荻野先生の数学は面白かった。もともとACクラスライブ(高1・高2ハイレベル数学)の授業での数学で基礎はできているから、サテラインで応用問題が結構出てよかった。

東 出： 荻野先生の数学は「こういう問題がきたらこの解き方を」みたいなのがけっこう手厚い気がする。

森 田： そう。それをクセ強く言うから真似をしたくなる(笑)

木 村： 僕は、高2で船口先生の最強の現代文と、富田先生のハイレベル英語。高3からは為近先生の物理、西村先生の化学、東大理科数学、東大英語を受けました。中でも富田先生の英語が良かった。それまで、英語って国語と似た感じで捉える先生が多いなって感じだったんですけど、それがいまいよく分からなかったんです。いつも、なんでその答えになるの？って思っていたんですけど、富田先生の授業は違って。なぜその答えになるのかを証明してくれる感じで。ちゃんと理由があるんだって納得して進んでいける感じだった。

東 出： 感覚でいかにず、頭をうごかして考えるみたいな感じだったよね。

木 村： そう！パズルみたいな感じ。感覚でいこうとすると、自分にはその感覚がないから(笑)。すごく合っていました。

受験勉強でしんどかったことなどはありますか。

東 出： 理系教科や英語は興味があったので趣味の延

長みたいな捉え方でできたんですけど、国語はしんどかった。

2 人： 同じく国語は苦しんだ。

東 出： 興味ないし、伸びないし。後半になっていくにつれて下がっていく。プレがひどくて。でも、模試のときは長沼先生の解き方がピンときてなかったんですけど、共テの追試を解いてみたらめっちゃくちゃ解けて。解き方が共テにすごく良いと感じました。

森 田： 僕は、長沼先生の解き方は評論文でやってた。

木 村： 私は国語は解決できず(笑)。やっぱり無理だったって感じです。

受験勉強で成長できたと感じることとは？

森 田： 考える力がついた。国語とか苦手だったけど、文章の裏とかをちゃんと考えるようになりました。アニメとかを見るときの、そのシーンの意味とかを、より考察するようになったと思います。

東 出： 教養がついた。大学入試くらいじゃないですか、こんな一気に勉強をしようっていうのは。自分の専門以外のことをいろいろ知ることができたと思います。

木 村： あきらめない心です。



受験勉強で楽しいと感じたことはどんなこと？

東 出： 僕にとっては化学を勉強するっていうのは、もうほんとに趣味に近い感じだったの。勉強を楽しめて、かつ、行きたい大学に行けるっていうのは楽しかったかな。

森 田： やっぱり問題が解けるっていうのは、楽しいって感じました。数学とかでも難しい問題が解けたら、やった！って。

木 村： 計画を立ててるときは楽しかったかなって思います。この計画でやっていったら1か月後にはどうなっているだろうみたいなのが、特に高3になってから楽しかったですね。あと、計画を立てて終わる人もけっこう多いと思うんですけど、ちゃんとやる。迷わず突き進むっていう力も大事だと思いました。計画通りいかないことももちろんあって、模試の判定が悪かった時とか。そんなときは採点基準をチェックしていました。どこで差がつくのかを確認して。現役生と浪人生の正答率とかも



差が出てたりするので、そういうデータも見えていました。ただ、それも時間をかけすぎずに、分析は午前中っていう風に時間を決めてやったりしてました。

森 田： そんな計画立ては、高3でもやってなかった。やりたいことだけやってた、みたいな(笑)。でも、サテラインや過去問演習は、曜日で教科を決めてました。それを1週間まわす感じで。長期的な計画はたてるけど、短期的なのは立てなかったです。

共通テストはどうでしたか。

森 田： 共通テストは怖かったです。でも、怖かったけど、大学別模試とかをドッキングしたらA判定だから、まっ750点くらいとれば行けるかなって(笑)

東 出： リスキーすぎる(笑)

木 村： 僕も共テは苦しんだ。共テの才能は僕にはないのかもしれない(笑)。めちゃくちゃ勉強したので、仮に浪人したとしても共テは無理だと思います。

東 出： 81%っていう学力じゃないやろ。もっとあるのに。絶対に。

木 村： 結局、共テが苦手だった。共テ終わってから出願校を決めるのも、岡先生とも何回もだいぶ話をして。他の大学で決まりかけていたけれど、最終、阪大にしたのは、友達がいたのがやっぱり大きかったです。科学の甲子園※のときにめっちゃ仲良くなった子も多かったし。あと、学校の先生たちも心配して声をかけてくれて、ギリギリの1月末にも話をしてもらって。最後、阪大の赤本を見て、ここにしようって決めました。

※第13回科学の甲子園全国大会
高等学校等(中等教育学校後期課程、高等専門学校を含む)の生徒チームを対象として、理科・数学・情報における複数分野の競技を行う。3名とも2024年3月に出場。

東 出： 阪大を激推ししたもん。俺も。

森 田： 俺はちょっとやけど(笑)。いや、いっぱい選肢があるだろうから。

二次試験はどうでしたか。

東 出： 化学の二次試験は、8割以上は埋めている感じでした。自己採点は怖くて見る事ができなかったんですけど。手応えはよかったです。

木 村： 二次試験は4完半(全5問中4問半解答)くらい。でも今年は簡単だったので、逆に心配でした。数学は難しい方が有利だったので。でも、英語や理科もまっ解けたので。

頑張っている後輩たちに向けて、メッセージをお願いします。

東 出： 僕は、中学のころとかは勉強もろくにしていなかったけど、こうやって大学受験成功したのは、やっぱり化学が好きだから。勉強に限ったことじゃないけど、やっぱり物事が好きっていうのは、人にものすごく大きな力を与えるなと僕は思っています。進路っていうのは、別に大学に行かなくても、例えば音楽が好きなら音楽に打ち込んでもいいと思うんですけど。でも大学入試を頑張りたいっていうのなら、いろんなことを勉強してみて、好きな分野に打ち込んでいくってことをしてもらいたい。難しくて理解できないみたいなこともあると思うんですけど、それを乗り越えた時に、その分野がもっと好きになったり大学受験でも使える武器になったりすると思うので。そういう勉強の仕方もあるんじゃないかなと思います。

森 田： 定期考査をがんばること。あきらめない。定期考査で範囲が広いからどこかを捨てるっていうのではなくて、どこも捨てるずに完璧な状態で。小さいころから、分からないところがいっぱいになるとどんどん点数も悪くなるから全部やるように言われていて。それを守って実行してきました。だから推薦に出せたっていうのがあると思う。絶対あきらめずに頑張ってください。

木 村： 最後まであきらめたらだめです。以上。

編集後記 ～インタビューを終えて～



彼ら3人に共通して言えることは、学問への探求心・好奇心が旺盛だったということです。木村君は数学、東出君は化学、森田君は物理と、それぞれ関心のある学問を極めたいという気持ちが、学力向上に繋がり、将来の進路に繋がっていきました。得意科目を得意化することの重要性を教えてくれた3人でした。

木村君とはよく面談をしました。計画立案が主な内容でしたが、計画倒れになることなく実行した彼の意志の強さは本当に素晴らしいと思います。

東出君の向陽中時代は、成績が真ん中あたりだったそうですが、高校に入り勉強の面白さに目覚め、グングンと成績が伸びました。

森田君は普段は効率重視で上手く勉強をするタイプですが、定期考査は高1の時から全力で取り組んでいました。受験に向けての取り組みや考え方は三者三様で、それぞれの個性が発揮された受験生活だったように思います。

また、「科学の甲子園」に出場したことも、たくさんの高校生との出会いがその後の受験勉強を支える大きなモチベーションになったと思います。高校時代に様々な経験を積むことの大切さも、彼らから学ぶことができました。

彼らの学問への探求心は、阪大という舞台で、更に深化していくことでしょう。4年後・6年後、どんな姿になっているのか、今からとても楽しみです。大学生になっても頑張ってください。